

生き人形

稲川淳二

生き人形について

これは、あまりにも有名な稲川淳二の語る「生き人形」のおはなしである。

「生き人形」は、私がこれまで聞いた怪異譚のなかでももつとも怖い話である。

文中でも語られているのだが、十年ほど昔、「生き人形」を収めたテープが発売された。

友人がこのテープを買い求めた。

ある日、その友人は中央高速を走る機会があつた。カーステレオで、買ったばかりの「生き人形」のお話を聞いていたという。すると、稲川さんが語る怪異と同じことが起こつた。

クルマの前方に、不思議な霧が浮かび上がっているのだという。それはまるでテレビのフレームのように四角になつた霧で、クルマはそれをいくつもいくつも突き抜けていったのだという。

怖くなつた友人は、即座にテープを止めた。

それだけに留まらなかつた。

友人は、テープを自宅のカセットレコーダで聞いていた。が、途中でぼん！という音がして止まつた。カセットレコーダが故障したのだという。

恐怖が現実を浸蝕するのである。

生き人形

稲川淳二は言う。

「この話は私自身・・・怖いです。それに危ない。出来れば話したくはなかったんですがね・・・」

昔、稲川さんがニッポン放送の、深夜のラジオ番組に出演していた頃の話である。

当時稲川さんと仲が良かった人で番組ディレクターの東さんという人がいた。

彼が稲川さんに

「淳二、一緒に帰らないか？」
と誘ってきたのだ。

というのも、稲川さんは当時国立に住んでおり東さんは小平の辺りに住んでいたので方角はほぼ同じだったのである。そして車は当時開通したばかりの中央高速道路に向かつて走っていた。高速道路に乗っても、深夜なので行き交う車はほとんどいない。

当時の中央高速は、道路灯も完備されていなくて辺りはほとんど真っ暗だった。稲川さん達のクルマの、前にも後ろにも車はいなかった。二人は普段から気の合う同士ということもあり、他愛もない雑談に花を咲かせていた。

「淳二、油揚げはな、こうやって食うとうまいんだぞ」
「やだなー、東さんは。アハハ」

稲川さんは、他愛もない話を笑いながらも、気になることがあったという。クルマの前方に、不思議な霧が浮かび上がっているのだ。それはまるでテレビのフレームのように四角になった霧で、クルマはそれをいくつもいくつも突き抜けていくのだ。

しばらく走っていた頃だ。三鷹を少し過ぎた辺りだろうか、例の奇妙な霧はなくなったが、道路脇の塀の上に道路標識らしい丸い物が立っていた。

（あれ？珍しいな・・・。）

その頃、中央高速道には標識はほとんど立てられていなかったのである。

しかし稲川さんは特に気にも止めず、標識は遙か後方へと過ぎて行った。

東さんは相変わらず面白い話をしては、稲川さんを笑わせている。しばらく走っていると、また同じような丸いものが見えてきた。再びその標識らしき物を通り過ぎたのだが、人間というのは面白いもので、同じ出来事が複数回続くと

「またあるんじゃないか？」

と思うものである。多くは偶然なのだが、稲川さんはさらに同じような物をはるか前方に見つけた。しかし、形が先ほどまで見ていた物と違うのである。距離はかなりあるはずなのだ。

しかし稲川さんはそれが、「人の形をしたもの」だと、すぐに気づいたそうだ。

人間の目というのは曖昧なのか正確なのか、良くわからない点がいくつかある。

信じられない程遠くにある「なにか見なれた物の形」、この場合は人の形なのだが、「あつ、○○○だ。」とすぐに認識できる場合がある。

例えば東京タワーのような高い建物の頂上に人が立っていれば、「人間が立っている！」と下から見上げる人達で大騒ぎになるであろう。しかしその時は深夜、辺りは真っ暗である。

なのに稲川さんは、その人間が「黒衣着物を着た、黒髪の少女」だという事が分かったそうだ。

その少女が真夜中の高速道路の塀に立っているのだ。道路の方では

なく外の方を向いて腰を少しかがめながらである。

（うわっ、自殺だ・・・！）

とつさにそんな事を思ったそうだ。しかし、その少女の周辺には車やバイクを停めている様子はない。

（どうやってここまで来たんだろう・・・？）

そう不思議に思ったが、車はだんだんとその少女が立っている辺りに向かって走り続けている。

稲川さんも東さんも冷房が苦手だということもあって、窓は全開にしている。

そのため、風の音や車の走行音でものすごくうるさい。

まるで吸い込まれるかのようにその少女を見ていた稲川さんだったが、そのうちその少女の首から下が風景と溶け合うようにしてスッと消えて行き首だけが残った。

その首がカクッ、カクッ、ときこちなく角度を変えて稲川さん達の方を向いてくるのだ。

人間が首を横に回すときのように「スーッ。」といった感じではなく、ぜんまい仕掛けで首を変に規則的に回す人形のような、そんな感じであつたという。

そしてさらに近づいた頃だ。稲川さんはその「首」が、明らかに「半透明」である事に気づいた。透けて向こうの景色が見えるのである。

しかし顔は確かに存在している。

おかつぱ頭、目は切れ長で口も横に長くて、気味が悪いほど肌は真っ白。

それでいて無表情。

その「首」が、気がつくと稲川さん達の車のすぐ前方に浮かんでいたのだ。

そうかと思うと首はフロントガラスをすり抜けて車内に入ってきた。そしてスポーン！と後ろに抜けて行ったのである。

（うわーっ！な、何だ！？今の・・・。）

しかし稲川さんは東さんにはその事は言わなかった。
不思議な事だが気づいていない様子だったし、稲川さんを降ろした後は東さん一人で自宅に帰らなくてはならないため、変に怖がらせては申し訳無い、と思ったからだそうだ。

（疲れてるのかもしれない・・・。）

そう思つて着を落ち着かせようと努めた。やがて車は稲川さんの家に到着した。

「どうもありがとうね、おやすみー。お疲れさ〜ん」

わざと明るく挨拶をして稲川さんは東さんと別れた。しかし、何となく肩が重いのである。

（ああ・・・疲れた・・・）

2階に上がつてみると奥さんが寝ていた。

疲れているはずなのに眠くはない。稲川さんは下の部屋のソファアの上で横になった。しばらくすると、稲川さんの耳にミシッ・・・ミシッ・・・という階段を降りる音が聞こえてきた。

見てみると奥さんが下に降りてきたのだが、稲川さんの顔を見るなりこんな事を口にした。

「お帰り・・・。お友達は・・・？」

「友達？そんなのいないよ」

「もう帰つたの？・・・さつきあたしが寝てるときに、あんと一緒に入ってきた人だよ」

「いや、この家に入ってきたのは俺一人だけだよ」

「ウソ。さつきあんたの後から部屋に入ってきて、あんたが出て行ったあとも部屋の中でグルグル歩き回つたの、誰よ？」

「・・・何だそれ？気味が悪い事言うなよ・・・」

寒気を覚えながらも、やがて夜が明けた。

稲川さんのもとにニッポン放送から一本の電話が入った。東さんである。

「おお、昨日はどうもありがとう！」

「・・・淳二さあ、昨日は悪いと思って言わなかったんだけど・・・」東さんが言い淀んだ。

「何の事？」

「昨日・・・誰かと一緒に車を降りたよな？」

「・・・何それ？」

「いや、隠さなくてもいいよ。分かってるから」

「・・・ちよつと待ってくれ、隠してるわけじゃないよ・・・今から局に行くからそこで話すよ」

ニッポン放送に着いた稲川さんは、さっそく東さんに事情を聞いてみた。

「・・・俺は実際に何か見えたわけじゃないんだけど、気配で感じてたんだよ。俺と淳二の他に、車の中に誰かが居たんだ。そいつが、淳二が車を降りたら一緒に降りたんだよ」

「そうか・・・実はさ・・・。俺も昨日こういう事があつたんだ・・・」

稲川さんは昨夜目撃した少女の事について詳しく東さんに話した。

東さんとの話も終わり、仕事も終えて帰宅すると稲川さんに電話がかかってきた。

人形使いの前野さんという人物からであつた。

「うわー、久しぶりだねー！元氣？」

二人は懐かしい話して盛り上がったのだが、前野さんが稲川さんにこんな事を言ってきた。

「稲川ちゃん、また今度舞台やるんだけど、そこに座長として出てくれないかな？」

聞けば、新しく手に入れる人形と一緒に芝居をやるという企画の

事だった。

前野さんという人はこの道ではかなり著名な職人で、評判の良い人形師の人だった。

今回のそのお芝居も大勢の有能なスタッフ、魅力的な俳優や女優、声優を用意した大掛かりな物になるという。

以前から演劇や戯曲等に興味があつた稲川さんは、親しい前野さんからの頼み事ということもあつて快く承諾した。

「いいねえ、やろうよ」

やがて段取りも順調に進み、出演者やスタッフ一同で顔合わせがあつた。

「どうもはじめまして」

「よろしくお願い致します」

自己紹介で一人一人が挨拶をして行く。一通り済んだ頃、前野さんが今回使用する人形についての説明を始めた。

話によるとその少女人形は、身長が125cm、かなり大きい。

普通の子供とさほど変わらない大きさで重量もある。よつて操作は黒子さんに扮する男性が3人がかりで動かすのだ。黒子Aは頭と両腕、Bは胴体、Cは両足。といった具合の役割である。

前野さんが、申し訳無さそうに室内の関係者に向かって口を開いた。

「えー、皆さん。大変申し訳無いんですが、肝心の人形はまだ出来ていないのです。ですが、今日皆さんにご説明するという事で、絵図面ですが持つてまいりました」

稲川さんも含めた関係者達の視線が前野さんに集まる。

「こちらです」

ピラッと図面を関係者達に見せるように両手で広げる。それを見て稲川さんは驚いた。

以前稲川さんが中央高速道路で見た少女とまったく同じ顔形なのである。

ふいに、イヤな感じがした稲川さんだったが、余計な事は言うまい・・・と思い黙っていたそうだ。

それからしばらくして、人形が出来あがってきた。

「へー、良く出来てるじゃない？」

稲川さんも変な事は考えないようにと思い、その人形について前野さんと色々な話をしていた。すると前野さんが、思い出したように不思議な顔をして稲川さんにこんな事を言ってきたのだ。

「でもねー、稲川ちゃん。この人形ちよっとおかしいんだよ。見てみな、ほら、右手と右足が
ねじれちゃうんだよ」

人形であるから操作しやすいように、関節の部分は丈夫な糸で連結してはいるが隙間は十分に空けてあるはずなのに、である。
しかも放っておけばダラ〜ン、となって自然にまつすぐになるはずなのだが右手と右足だけがまったくいう事をきかないのだ。

「前野さん、俺が直してあげようか？そういうの出来るからさ」

「う〜ん・・・いや、やっぱり作った人がいいから、先生のところに持っていくよ。悪いからさ」

「それもそうだね」

こうして初稽古の日は終わった。

自宅に帰った稲川さんは、人形の事を聞いてみようと思い前野さんに電話をかけた。

すると前野さんも丁度良かった、といった口ぶりで稲川さんに話してきた。

「おかしいんだよ、稲川ちゃん。人形を作ってくれた先生なんだけどさ」

「うん、どうしたの？」

「行方不明なんだって」

「え？何それ？」

「うん、こつちから先生のところにはどうしても連絡がつかないから、色々な人に聞いてみたんだよね。そしたら、あの人今は行方不明なんだって、って言うんだよ」

「なんだ・・・しょうがないね・・・」

人形の修理は出来なかったが、そうこうしているうちに今度は台本が出来てきた。

文学座関係の作家で、の斉秀一さんという人物である。さつそく稲川さんや演出家の人達と共に原宿で打ち合わせが行なわれた。

「先生、ここどうしましょうか？」

「ああ、ここは稲川ちゃんがアドリブでやってよ。その方が面白いからさ」

「アハハ。はい、分かりました」

打ち合わせは順調に進み、その場はお開きとなった。

「僕は今日これから、帰ったら台本仕上げちゃうよ」

「あ、どうもすいません。よろしくお願い致します」

その日の夜。稲川さんの元に前野さんから電話があつた。

「やあ、前野さん。どうしたの？」

受話器の向こうで表情は分からなかったが、前野さんの様子は只事ではなかった。

「稲川ちゃん大変だよ・・・！」

「・・・どうしたの？」

「先生の家、火事で全焼しちゃったんだよ・・・」

「ええっ!？」

「さつき僕が電話したときは燃えてる途中だったみたいんだけど、今さつき連絡が取れたんだよ・・・全焼なんだって」

「原因は何なの!？」

「分からない・・・でも先生が書いてた台本の原稿、書斎から出火

したもんだから全部燃えちゃったって・・・」

しかし舞台の稽古は続けなくてはならない。仕方が無いので台本無しという緊急事態のまま稽古は本格的に始まった。

稽古が行なわれていたある日の事。突然前野さんが稲川さんに

「稲川ちゃん、ちよつとごめん。電話してきていい？」

と尋ねてきた。前野さんは、普段は稽古熱心で途中で席を外したりする事がほとんど無い人だった。それが中座するというので稲川さんは不思議に思ったが、

「ああ、いいよ？行つて来なよ」

「うん、ごめんね」

そして階段脇の公衆電話に向かった前野さん。しばらくすると、通路の方から

タッタッタッタッタ！

と、駆け足の音が聞こえてきた。前野さんだった。大柄な人のため足音も大きいのだ。

「ごめん、稲川ちゃん。帰らなくちゃ・・・」

「どうしたの、前野さん。何があつたの？」

当時前野さんは家庭的にもめてる事があつた。兄弟同士でみにくい争いがあつたのだが、前野さんは普段そういつた事には無関心な純粹な人であつた。前野さんを含む兄弟には中野に住む年老いたお父さんが居た。

しかし親をそんな争い事に巻き込んで可愛そうだという事で、稲毛にある自分の家に引き取り、当時45歳になる従兄弟の男の人に面倒を見てもらっていたのである。

この時前野さんは自分の家に電話をかけたのだが、出たのは警察の人だったという。

前野さんのお父さんの面倒を見てくれていた45歳の従兄弟が、急

死したのである。原因は警察が調べているところなのだが不明らしい。とにかく帰ってきてくれ、と警察に言われたのである。

「イヤな事が続くねえ・・・」

稲川さんは思わずつぶやいた。

そして、色々とゴタゴタが続いたが舞台はいよいよ公演の日を迎える事ができた。

評判は上々で、稲川さんや他の出演者達がTVに出演する事もあった。

そんなある日の公演。朝、稲川さんが現場に出向くとその場所にいる人達の様子がおかしい。気が付くと、美術さん、照明さん・・・ありとあらゆるスタッフや出演者達が怪我をしているのだ。包帯を巻いたり湿布を貼ったり・・・。

「ガラスで切った」

「包丁をすべらせて刺してしまった」

理由は人によつて色々あるのだが、怪我の場所は全員が同じ「右手と右足」だった。

そして、その日の公演「昼の部」直前の事である。

稲川さん以外の出演者が全員倒れてしまったのである。熱を出したり下痢を起こしたり・・・。とにかくお昼の公演は無理である。

お客さんには事情を説明して、お昼の部のチケットでも、その日最後の「夜の部」を見られるように、見ない人にはチケットを買い戻すという措置が取られた。

そして稲川さんの発案で、大変ご利益があるというお寺に行つて関係者一同お払いをしてもらう事にした。夜になる頃には具合の悪かった出演者たちもいくらか回復し、夜の公演が無事に行なわれる事となった。お昼の部のチケットを持っている人は、ほとんどが帰らずに夜の公演を見ることにしたらしく、会場は立ち見客を含めて満員だった。そろそろ暖かくなってくる時期だしそれほどまでに人が大勢集まっているにもかかわらず、客たちは声を揃えた。

「この会場寒いよね・・・」

稲川さんは舞台の袖で待機していた。そこへ、稲川さんの家に居候していた人がやって来た。何とも奇妙な顔をしている。

「稲川、おかしいよ・・・」

「何が？」

「黒子さんの衣装を着た出演者は何人居る？」

「えーと、そうだなあ。少女人形3人、少年人形3人、それと舞台監督さんだから全部で7人だろ？」

「・・・8人居るんだ」

「・・・ウソつけ！」

舞台の背面にある壁には、幕が天井から舞台の床まで垂れ下がっている。

その幕に色々な光を当てたり影を投影させたり、特殊効果を与えて演出して行くのだが、幕と壁の間のわずかな隙間に人が立っているというのだ。

「・・・お前それ誰かに言ったか？」

「いや、言っていないよ」

「言うんじゃないよ？・・・皆気にするからさ」

とは言ったものの稲川さん自身も気になって当たり前である。目は自然とその

「誰かが立っている辺り」を見てしまう。すると、小さな明かりが2つ見えた。

（ああ、なんだ。舞台監督さんか。メガネに光が反射してるんだな？）

と思って少し安心した。しかし、しばらく見ているとその小さな光2つが、ゆっくりと稲川さんの方を見るように角度を変えてきたのだ。

（そんなはずって・・・ないんだよね・・・。）

この時の様子を、稲川さんは思い出すとゾツとするという。それもそうである。

もしメガネに光が反射しているのであれば、角度を変えた瞬間光を

反射させている「光源」からメガネまで光が届かなくなり、消えるはずだからだ。しかしこの時点では稲川さんは気が付かなかった。舞台監督さんの声が聞こえて来たからだ。

「稲川さん、こちらです。稲川さんこちらです」

小さな声で誘導してくれる。

舞台が暗転、つまり真つ暗闇のうちに稲川さんは舞台上がり、所定の場所まで歩いていく。だが暗くて足元が見えないために舞台監督さんが誘導してくれるのだ。

舞台の真中辺りに稲川さんが差し掛かった時である。稲川さんはハッとした。

少年人形、少女人形の黒子さん6人は自分のすぐ間近に居る。舞台監督さんはホリゾントの後ろ、つまり小さな光が2つある場所とはまったく違う、舞台の反対側の袖に居るのだ。

居候の彼が言っていた事は証明されてしまったのである。

やがて稲川さんがスタート位置に付き、ホワイトスポットが稲川さんに当たり舞台が始まった。その瞬間。

パーン！

という乾いた音と共に少女人形の右手が割れたのである。中からは骨組みが見えていた。

舞台も佳境に入り、ある役者さんがその少女人形を棺桶に入れて引っ張るというシーンでの事である。棺桶は丈夫な木で作られた物で重さが8kgもある。しかし大の大人が二人掛りでも持ち上がらないというほどの重さでもない。しかし、持ちあがらない。

まったくビクともしないのだ。やがて棺桶からはフワッとドライアイスを入れたように霧が立ち込めてきた。

「わー……。すごい」

お客さん達は上手な演出だと思いこみ、拍手をしながら見つめている。仕方が無いので棺桶はその場に置いておくこととなった。

やがて棺桶を引っ張る役の役者さんが戻ってきて舞台監督さんに尋ねた。

「……ドライアイスなんていつ入れたの？」

「……いや……入れてないよ」

そして舞台は最後の場面を迎えた。声優の杉山和寿子さんという女性性が、後ろを向いたかと思うと老婆の格好から綺麗な女性に一瞬にして早変わりする、というとても美しいラストシーンでの事である。なにしろ外国の取材陣が見て絶賛したほどの、最後の見せ場であった。杉山さんが後ろを向いた瞬間の事だ。

なんと杉山さんがかぶっている頭のかつらに火が付いたのだ。確かに演出で火は付く事になっていた。しかしそれは本当の火ではなく、例えばボール紙を切りぬいて火の形を作り色を塗ったような、作り物の火なのである。

舞台は騒然となった。

お客さん達もそれが演出ではなく事故だという事に気が付き大混乱となった。

そうでなくともあまりにも不可思議な現象が多発していたためにスタッフですらパニック状態である。結局この日を境に舞台は、事情をお客さん達に説明して、公演その物を中止せざるを得ない状況にまでなってしまった。

そんな事があつてしばらく経った頃。稲川さん達が行なったこの公演で不吉な出来事が多発しているという事を知った東京にあるTV局の人間が、稲川さんに連絡してきた。

「その怖い話を、TVで紹介するみたいな、そういう番組をやらせてくれないか？」

「いや……それは……やめた方がいいんじゃないかな……」

そう穏やかに警告した稲川さんだったが、TV局の人は熱心に稲川さんに相談してくる。

その熱意に押され稲川さんは結局、

（前野さんという、今は人形の責任者みたいな人がいるからその人に聞いてみてあげる。）

と約束してしまったのだ。前野さんはすぐにTV局の人の要望を承諾したのだが、前野さんは最後にもう一度だけ、中止になっていた舞台をやってからTVに出たい、と言ってきたのである。

しかし稲川さん自身は、あまりにもその舞台には不吉な出来事が起きていたので、TVの仕事も舞台とも、縁を切りたいと思っていた。しかし、いつもらしくない前野さんの半ば強引な勧誘に誘われ、シブシブ承諾してしまったのだ。

「じゃあ稲川ちゃん、明日TV局だよ。忘れないでよ！」

そういつて前野さんは自宅に一度帰って行つた。自宅では、その日の朝まで元気だった父親が原因不明の死を遂げている事を知らずにこの事を知った稲川さんは、人形について少し自分なりに調べてみようと思ひ立つた。

従兄弟に続いて今度は前野さんの父親が死に、ますます状況は良くない。

それを聞いたTV局の人も「それはますます凄い！」と、不謹慎にも大喜びしている。

あの少女人形には何かあるはずだ・・・。

稲川さんの耳に不気味な話が入ってきたのはその頃だ。

行方不明となつていた、少女人形を製作した本人。彼が見つかったのだ。京都の山奥で一人仏像を彫っているというのである。まるで世捨て人のように。

しかし、彼は東京から京都まで、いっとうやって行つたのか？

いったい何の目的があつたのか？

しかし、人形師の記憶は、完全に失われていて、判然とはしなかった。

その場所にTV番組のレポーターとして小松方正さんがスタッフと共に向かう事になった。

小松方正さんを含めた関係者達は取材の前日、同じホテルに全員分

を予約している。

しかし、ホテルに着いた関係者全員が今でも首を傾げるというのは、いざ皆で取材に行こうと皆で待ち合わせ場所に行っても、全員がそろわなかった事だという。

同じ日に同じホテルである。インターホンもあるし、連絡はいくらでも取れるはずだ。

現にスタッフの一人が、

「これから皆で現場に向かうので、1階のロビーまで来てくださいね」

と、確認の電話を全員に入れたらしいのだ。

後日稲川さんが小松方正さんに聞いてみたところ、小松さんの場合は集合の電話をもらってまもなく1階のフロントまで行ったのだが、誰もいないのでしばらく待っていたそうだ。

それでも誰も来ないので場所を間違えたかと思い、スタッフ達を探しに周ったらしい。

あるスタッフによれば、やはり集合の電話をもらってから間もなく1階のロビーまで行ったのだが誰もいない。つまり全員が全員「行き違い」だったのだ。

結局この撮影ではスタッフ達が集まらないために撮影は中止。全員で東京に引き上げたのである。

しばらくしてから、今度は一度スタッフだけ先行して現地に向かうという事になった。

しかしである。

TV局の人間が手配した新幹線の切符は、全員が全員、乗る時間、乗る電車、目的地がバラバラで使い物にならないという事態が起きていた。

切符の手配をした人にもJRにも、まったく不手際はないのだ。

そういった混乱がありながらもTV局も今度は強行日程である。全員で到着するなり京都にいる人形の製作者にインタビューをして、日帰りで東京まで帰ってきたそうだ。

ところが、東京に戻った彼らを恐ろしい出来事が待ち構えていた。自宅に戻ったこのTV番組のディレクターの奥さんの、首から下が真っ赤に腫れ上がっていた。原因は不明。

そして新幹線の切符を手配した女性の息子さんが交通事故に遭って入院していた。

更に脚本の構成家、彼の家で飼っている犬が、前足がガクガクになってしまつてまづたく立てない。同じく原因は不明。

誰ともなしにそれらの出来事が起きた時刻を話してみると顔色が変わつた。

ほぼ同じ時刻だったのだ。

稲川さんも含めたTVスタッフ達の間にも重苦しい雰囲気が立ち込めていた。

しかし撮影は進んでしまつていゝ番組も放送の構成をされてしまつてゐる以上続行しなくてはならない。

稲川さんの家にもカメラは入つて少し撮影して行つたそうだ。

そしていよいよ、今度はTV局のスタジオ収録の日がやつて来た。

収録はそのTV局の最上階にあるリハーサル室で行われる事となつた。

スタジオ内のほぼ中央にあるイスに腰掛けて合図を待つ。

目の前のカメラを操作している人や照明さんは、稲川さんとは旧知の間柄であつた。和やかに準備は進む。やがて開始の合図が出て収録が始まつた。

「・・・えゝ、私つい最近人形と一緒に芝居をする事になりました・・・これは人形にまつわる」

と話したところでスタッフが撮影を止めた。

「ごめゝん。カメラ止まっちゃつた」

故障である。仕方なく、別のカメラを持ってきて撮影は再開された。

「・・・えゝ、私つい最近人形と一緒に芝居をする事になりました・・・これは人形にまつわる」

「・・・また止まっちゃった・・・」

故障が立て続けに起きてしまったのだ。今現在使えるカメラがここには無い、という状況になったため、倉庫においてある古いカメラを持つてくる事となった。

用意されたカメラは、太いワイヤーの付いた巨大なカメラ。今から20、30年前くらいに使われていたようなカメラである。

しばらくのセッティングの後、撮影は再び始まった。しかし、この頃になると稲川さんを含めたその場にいる人たちは、いい知れぬ恐怖に囚われていた。

そうでなくても色々な事故や不吉な出来事が起きているお芝居の話であり、今はその話を扱うTV局にも降りかかってきているのだ。しかし稲川さんは恐怖を我慢して気分を落ち着かせ、冷静に話し始めた。

「・・・え、私つい最近人形と一緒に芝居をする事になりました・・・これは人形にまつわる・・・」

ドンドンドンドンドンドンドンドンドン！！

突然リハーサル室の扉を叩く音がスタジオ中に響き渡った。

カメラは回っている。外の壁には「本番収録中」を知らせる赤いランプが点灯している。

それにそもそもここはTV局である。

そんな事をする人間はTV局内には一人もいない。

しかし扉を叩く音は段々と大きくなって行く。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドン！！

稲川さんもその音のあまりの大きさに驚きながらも、カメラは回り、本番の撮影中であつたため話を続けた。

しかし、ふと稲川さんは視線を感じた。番組のディレクターである。彼は稲川さんの様子を見て、観客を見て、スタッフを見た。

明らかに困惑しているのである。尚も扉を叩く音は鳴り止まない。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドン！！！！

するとディレクターが真つ青な顔をしながら扉の方に向かって走って行き、扉を勢いよく開けた。

バーン！！！！

誰も居ないのである。

現在稲川さんたちが居るこのスタジオは通称「Aリハーサル室」と呼ばれており、廊下を挟んだ向かい側にもう一つ「Bリハーサル室」がある。

しかしこの時「Bリハーサル室」は使用されておらず、扉には鍵がかかっていた。

さらに、この階は廊下が一本道で、奥の突き当たりにエレベーター、そしてエレベーターの横に階段が一つあるだけで他に人が隠れることができないような部屋は無いのである。それにも関わらず誰も居ないのである。

パタパタパタツ・・・！！

と走り去るような音が聞こえるのであればまだ、いい。

そんな音すら何も無かったのだ。

結果的にこの番組は、その後関係者達やTV局に事故があまりにも多発したために収録は中止。放送もされる事は無かった。

しかししばらくすると、今度は東京にあるもつと大きなTV局から稲川さんの元に依頼があった。その少女人形にまつわる色々な怪奇な出来事を、紹介してくれというこの前のTV局とほとんど同じような内容であった。

当時稲川さんはこのTV局で放送されていた芸能人の私生活追跡！みたいな番組で突撃レポーターといった役で出演していた。そして時期も丁度夏場であったため、この番組のディレクターが稲川さんに声をかけたのだ。

稲川さんもあまり深く考え無いようにしていたため、これを承諾した。

そして収録の日、TV局に着いた稲川さんが楽屋で休んでいると前野さんが例の人形を大事そうに抱えて到着した。その人形を見たとき、稲川さんはある事に気が付いた。

人形の髪が伸びているのである。

以前稲川さんがその人形を見た時には、おかっぱのセミロングであった髪が、この時点では完全に肩にかかっているのである。

一瞬自分の気のせいかとも思った稲川さんだったが、どうにも釈然としなかったらしい。

やがて前野さんは、楽屋にいるメイクさんからクシを借りて人形の髪をとかし始めた。

その様子をなにか背筋に寒い物を感じながら見ていた稲川さんに、前野さんが話しかけてきた。前野さんは当時五十一歳であった。

「他の人形は売ったつていいんだけど、この人形とだけは絶対に別られないからね・・・」

尚も前野さんは笑顔で人形の髪をとかしている。

その後りハーサルが行なわれ、四十五分後に本番が始まった。

この番組は生放送である。しかし本番が始まったとたん、停電になってしまった。

他のスタジオや調整ルームに連絡してみると、不思議な事に他の場所も停電になっていなかった。

やがて電力も回復し、あらためて本番が始まる事となった。人形には紙風船が付けられてイスに置かれ、床には玉ジャリが敷かれ、最後に黒い大きな幕が垂れ下がっている。

そして番組司会の野村さんという人物が

「次は火曜日に出演している稲川さんのお話による、人形にまつわる怪奇なお話です」

といった紹介をした後に人形が映り、CMに入る・・・という段取りであったのだが、人形が映った瞬間に背後に下げてあった幕を天

井につないでいる何本ものヒモが

スパッ！！！！

と音を立てて一斉に切れ、幕が床に落ちてきたのだ。

1本1本、プツンプツンと切れるのではなく、同時に切れたのである。そして落ちてきた幕が人形に当たり、人形はあたかも人間が床に崩れ落ちるかのようにガクガクツと体中の関節を動かしながら床に落ちた。

そして次の瞬間、TV局においては絶対に起きてはいけない、というよりは起きないはずの事が起きてしまった。天井に設置してある照明が落ちてきたのだ。

照明一基とはいえ、一つ一つは大変な重さである。それ故落ちてきたらこれほど危険な物は無いため、絶対に落ちないように鎖で何重にもつなぎ、固定してあるのだ。

落とそうにもなかなか落ちない物なのである。それが落ちてきてしまった。

さらに、照明が落ちてきた地点とは離れた場所にあつたカメラが壊れてしまったのだ。

そして、この時スタジオに居たスタッフが一人、後日亡くなったそうだ。原因は不明。

この番組にアシスタントとして出演していた女性のタレントも、後日交通事故を起こし、雑誌で一斉に騒がれたために、その後芸能界から完全に引退してしまった。

こういった事件が次から次へと起きる事を知った稲川さんは、前野さんに相談を持ちかけた。

「もう、この人形を人目にさらすのはやめよう。舞台の事もその後の事件の事も、この人形にまつわる色々な不幸を番組で話すのも、いい加減にやめよう」

という事であつた。それほどまでに色々な事が起きすぎていたのだ。

前野さんも稲川さんの話に納得し、稲川さんと前野さんは2人でこの人形を、久慈玲雲さんという有名な霊能者の方が居る事務所に持

つていき、供養をしてもらう事にした。

その後はお寺に納めてもらおうと思ったのだが、久慈玲雲さんは

「イヤだ。その人形は見たくない」

と言って稲川さん達の申し出に応じないのである。久慈玲雲さんはこの人形を今まで一度も見たことが無いのだが、まるで全てを知っているかのように2人に説明してきた。

「こういうのは怖い。人間には魂があるけれど、人形には当然魂は無い、だから色々な念が入りやすい。もし動物や子供の霊が入ってきたらたまらない、私にも手に負えない」

しかし2人も必死にお願いして、結局久慈玲雲さんもしぶしぶではあるが供養してくれる事となった。

2日後。

稲川さんと前野さんの2人は人形に宿っているかもしれない得体の知れない何か成仏してくれたという事を話題にしながら久慈玲雲さんの事務所を訪れた。

お礼を言いに来たのである。しかし、事務所は閉っていた。

「あれ・・・？おかしいな」

仕方が無いので電話で連絡を取ってみてもつながらない。

仕方が無いのでこの日はあきらめる事とした。

やがて1週間後に、今度は稲川さんが1人で事務所を訪れたが、やはり閉っている。しかしいつの間にか事務所の看板は無くなっていた。

それっきりであった。

稲川さんは久慈玲雲さんとまったくの音信不通となり、完全に行方不明となってしまった。

それから随分と経った頃の話である。

稲川さんが、久慈玲雲さんが亡くなっていた事を知ったのは。

稲川さんの知り合いで、雑誌記者の人物がおり、この人も久慈玲雲さんの事を探していたらしいのだ。この人が久慈玲雲さんの様子を克明に調べ、雑誌に掲載したのである。

それによれば、稲川さんと前野さんの2人が人形を持って訪ねた日の夜、突如倒れたのだ。しかしその場に居た人にも原因が分からなかったために病院に運んで行っただという。

久慈玲雲さんというのはかなり大柄な、体重も八十キログラムを超える太った女性の方であったのだが、3日でガリガリにやせ細ってしまったそうだ。死亡時の体重、なんと三十キログラム台。

首を傾げ、不可解な笑みを浮かべた死に顔だったという。

「・・・そんな事あるの・・・？」

とても信じられない話に稲川さんも驚いたという。

その後稲川さんは前野さんに、この人形は写真を撮って、その写真だけ大事に持ち歩いているようにして、人形はお寺に預けようともう一度持ちかけた。

前野さんも納得し、稲川さんは知り合いのカメラマンの方に相談してキレイな写真を撮影してもらう事にした。

久慈玲雲さんの事務所から引き取った人形を前野さんが撮影スタジオに持つて行き、撮影は行なわれた。

稲川さんと前野さんの2人は建物にある休憩所で待っていたのだが、写真を現像し終わったカメラマンが、悲鳴を上げながら暗室から飛び出してきた。

驚いた稲川さんはその、たった今現像した人形の写真を見て思わず声を上げた。

今3人の目の前にある人形はまったくの普通である。

しかし、写真に映ったその人形の姿は、すでに少女の姿ではなかったのだ。

髪は床まで伸び、目は切れ長で妖艶な唇を持ち、真っ白い肌で顔立ちにはほっそりとしていた。それは紛れもなく成人した女の姿で映っ

ていたのである。

3人はその場に立ち尽くすしかなかった。

しかし、稲川さんはこの時の事を思い返して悔やまれるのが、2人でお寺に人形を預けに行けば良かった、という事だという。

前野さんはその後、稲川さんから

「間違いなく預けるようにね」

と念を押されていたにも関わらず、預けずに自分の家に持って帰ってしまったのだ。

その後、今度は大阪にある有名なキーTV局から稲川さんの元に依頼があった。

もはや3回目となるのだが、やはり時期も丁度いいあの人形についての番組を撮りたいから稲川さんにも出演して欲しいという事だ。

この番組は毎週月曜日から金曜日の午後二時から放送している大変な人気番組であった。

「稲川さん、おすぎさんから聞いたんですよ。今話題になってますよね？シーズンも夏ですし、ぜひやりたいんですよ」

「いや・・・もう、やめて下さい。あの話はしたくないんですよ。申し訳ありませんが行けません・・・」

稲川さんはハッキリと断った。もはやあんな恐ろしい思いをするのはご免だったのである。

しかし、ディレクターの話を一度は断った稲川さんの元に、何度も誘いが来る。その内稲川さんと親しい人物も依頼をして来たため、とうとう断りきれずに番組への出演を承諾してしまった。

「分かりました、では人形使いの前野さんという方と一緒に出ましょう」

こうして稲川さんと前野さんの2人は新幹線で大阪に向かった。

そして番組のリハーサルが始まった。稲川さんはスタジオの真中に置かれたイスに座り、話す事となっている。稲川さんの背後には黒い大きな幕が天井から垂れ下がっている。

黒い幕の前には番組のタイトルを書いた大きなパネルの吊り下げられている。

リハーサルが始まり、いざ稲川さんがイスに座ると天井の方から

ヒューーーーーー・・・。

という、笛の音のような音が聞こえてきた。

（おお・・・雰囲気でてるなあ・・・。）

思わず稲川さんもそう思ったほどその音はハッキリと、大きく聞こえてきた。

このスタジオは通常とは違い、実際に収録する場所と音声等を調整する調整ルームが同じ床の上にある。

通常は調整ルームだけが同じ階とはいえ階段を上っていった天井近くのスペースにあり、管理するのだ。その調整ルームから声が聞こえてきた。

「いいかお前ら！今日も番組成功させるぞー！失敗しても幽霊のせいにはしたらいかんぞ！」

「何言ってるんすかー、アハハ」

楽しそうに話している声である。

本番まではまだ時間があるため、稲川さんは前野さんを誘いコーヒーでも飲もうと、休憩コーナーに向かった。するとそこではなにやらトラブルがあつたらしく、複数のスタッフが大声で怒鳴り合っていた。

稲川さん何事かと思い、遠巻きに様子をうかがう。

「おい！なんやねん、あの音は！」

「い、いえ・・・。それが俺達にも分からんのですわ・・・」

「分からんって・・・お前ら音声やろが！？」

するとその場に居た別のスタッフが、スタジオ内の音声を管理する現場の責任者を見つけた。先ほど調整ルームでスタッフが気合を入れていた人物である。

この管理者もこの場に呼ばれたのだ。

「あ、来ました。チーフです！」

「なんすか？」

「さつきから聞こえてるあの音はなんなんですか!？」

「いやー・・・俺らにもサッパリ分かんのです」

「あ・・・分かった。ふざけてそんな事言ってるのとちやいます?」

緊迫した空気が少しやわらいだ。笑い声も沸き起こる。

「そんな事しませんって!バカにせんといて下さい!!!!」

「またまたー、何言つとるんですか。この、この」

「・・・わし、やつとらんぜ!!!!」

管理者は本気で怒り出してしまった。その様子を見た周りのスタッフたちの間に、再び重い空気が流れる。

稲川さんと前野さんは邪魔しないように静かに缶コーヒーを飲んでいたのだが、その稲川さんの元に遠くから廊下を走ってくるスタッフが1人いた。

もの凄い勢いで走ってくる。そして息を切らせながら稲川さんに話しかけてきた。

「す、すいません稲川さん。今・・・番組に出演するはずだった霊能者の方が、局の前の道路で車にはねられちゃったんです・・・!」

「・・・ええっ!？」

思わず窓の外に目を向けると、外からはパトカーや救急車のサイレンの音が聞こえてくるのだ。

ファンファンファンファン!!!!

救急車が遠ざかる。

「・・・あれがそう・・・?」

「そうなんです・・・!」

「で・・・どうするの?」

「ええ、ですから本番に間に合うかどうか分からないんですが、別

の霊能者の人を呼びますから、番組の中でつないで欲しいんですよ」
「うん、分かった。つなぐよ」

するとその場に、同じ事を稲川さんに報告しに、プロデューサーがやって来た。

「稲川さん、実は大変な事になっちゃって・・・」

「ええ。今A Dの彼から聞きましたよ。大変ですね」

「いや・・・その事だけじゃないんですよ」

「・・・？」

聞くとところによると、その霊能者の人は「2人目」だというのが。最初の1人目は、前日の夜にそのプロデューサーがTV局の向かいにある大きなホテルのバーで会っていたのだという。

その場では翌日の収録についての軽い打ち合わせのような事が行なわれていたのだが、その霊能者の人がそれまでは翌日の出演について特に何も言っていなかったにも関わらず、打ち合わせの最中急に

「・・・やっぱり、申し訳ないんですが明日の出演はやめさせていただきます」

と言つて来たというのだ。

「ええっ！？ど、どうしたんですか、急に！？」

「いえ、申し訳ありませんとしか言えません。わたしは行かない方が良いみたいです」

「そ、そのような事を今になって急に言われても・・・。どうしたんですか？一体・・・」

「・・・これはちよつと、私の手には負えないようです・・・」

「なにがですか？」

「・・・さっきからあそこで・・・女の子が私の事をジーツと見てるんです・・・」

と言つてプロデューサーの背後の方角を指差した。

思わず後ろを振り向くプロデューサー。

「・・・誰もいないですよ・・・？」

「・・・いえ、わたし見えていますから・・・。多分・・・人形の女の子だと思います・・・。私行ったらきつとまずい事になります・・・」

「・・・いや、あの・・・そんな事はないですよ」

「いや・・・まずいです・・・」

「そこをどうか・・・頼みます！」

プロデューサーは必死で説得したという。

「・・・分かりました・・・。では行きましょう」

こうして1人目の霊能者の人は出演してくれる事になったのだが、プロデューサーと別れた後、この霊能者の人は原因不明の高熱を出し、倒れてしまったという。そのために出演は無理という事になり、仕方がなく大急ぎで別の霊能者の人物を探し出し、TV局に来てもらう事となった。

その2人目の霊能者の人もまた、局の目の前で車にはねられるという事故に遭ってしまった訳である。

そして霊能者の人が不在のまま番組は始まった。生放送であるために本番である。

稲川さんはイスに座り前方を見た。

しかし丁度真正面から強いライトが当たっているために、まぶしくて前がよく見えない。

話し始める合図は誰が出してくれるのか分からない稲川さんは横を見た。

すると、背後にある黒い幕が引っ込んでいるのだ。

分かりにくい状況のため補足すると、稲川さんたちがいる側を黒い幕の表として、そして幕を隔てた向こう側を裏とする。裏側にもし人が居たり何か物が置いてあるのであれば、幕が稲川さん達が居る表側の方に向かって出っ張っているはずだ。

しかしそうではなくて、稲川さん達が居る表側の方から裏に向かって幕が引っ込んでいるのである。当然、何もない。

その引っ込みが、徐々に稲川さんに向かって進んでくるのだという。

（うわ・・・イヤだなあ・・・。）

そう思いゾツとした稲川さんであつたが、カメラに向かつて話し始めた。

やがて話も一段落して、稲川さんはゲストの席に座る。

3人目の霊能者の人も本番中に間に合つて、稲川さんの横に座つた。そして挨拶をする2人。

「今回はよろしくお願い致します」

「いえ、こちらこそ。・・・ところで稲川さん、今何か感じませんか？」

「ええ、今こんな事があつたんですよ・・・」

と言つて稲川さんは黒い幕の所で見た不可解な現象について説明した。

すると霊能者の人はこんな事を口にした。

「ええ・・・ここに居ます・・・」

と言つて稲川さんの肩の上のあたりを指差した。

「え・・・？」

「・・・居るんです・・・。今稲川さんの上に男の子が1人・・・」

そしてさらに、番組の段取りにはない事を言い出した。

それによれば、番組を観にスタジオまで来ている奥様達が大勢座つている観客席の上に、照明がたくさんセットされている太くて長い棒がある。その棒がこの時にはちょうど観客席の真上にあつたのだが、

「お客さん達が危ないから、皆さんどうかして下さい」

と言つて来たのだ。稲川さんもさすがに（何を言い出すんだろう。）と思つたという。

この事を聞いたスタッフが、

「すいませ〜ん、ちよつと移動して下さい」

と言いながら観客の奥様達を誘導して別の席に移した。

すると次の瞬間、

ガシャーーーーーー！！！！

という物凄い音を立てて、その太い棒をつないでいる2本のクサリのうち、1本が切れて棒が宙吊りの状態になって、音を立てて揺れている。

ガシャン！！！！

ガシャーーーーーー！！！！

ガシャン！！！！

その光景を見た番組司会のタレントの男の人は、口を開けたまま茫然と見つめている。

「な・・・なんや、これ・・・どないなつとんや・・・」

そう言つてブルブルと震え出した。

観客の奥様達も恐怖のあまり泣き出してしまった。

すると別のフロアからスタッフが1人、大声で叫びながら本番収録中のそのスタジオに駆け込んできた。

「い、稲川さーん！！！！た、大変でーす！！！！電話が鳴りっぱなしです！！！！視聴者の人達からで、稲川さんの斜め上と少女人形の斜め上に男の子が1人映つてるといふんです！！！！」

この言葉を聞いた司会者が、半狂乱で叫んだ。

「モニター回して見せてみー！！！！」

スタッフの誰かがモニターを司会者や稲川さん、霊能者の人、番組のアシスタント達に見えるようにクルリと向きを変えた。

映っていた。
視聴者が生放送中の番組をTVで見たら霊が映っていた、などといった生半可な状況ではない。現在出演中の稲川さん達タレントやスタッフたちにも、実際の場所には誰も居ない場所を映し出した映像上に、ハッキリと確認できる程鮮明に男の子が1人映し出されているのだ。

「いやああーーーー！！！」

それを見たアシスタントの女の子は泣き叫んでしまった。
現場のカメラマン達もガタガタ震えている。相変わらずスタジオ内では

ガシャン！！！！

ガシャンーーーーー！！！！

ガシャン！！！！

と天井からぶら下がっている棒が音を立てて揺れており、

ヒューーーーーー！！！！！！！！

という笛の音のような音も先ほどよりも明らかに大きくなっている。
プロデューサーはただおろおろと狼狽するだけである。

「なんや・・・どないなつとんのや・・・この番組どうなつとんのや・・・！！！」

「キャーーーーーッ！！！」

「ヤダーーーーッ！！！」

ガシャン！！！！

ガシャンーーーーー！！！！

ガシャン！！！！

「おい！！！！あの音何とかしろって言ってんだろぅが！！！！」

「こつちだつて何がなんだか分かんねーんだよ!!!」

ヒューーーーーー!!!!!!!!!!

「ウワーーーーッ!!!!」

「おい!鎖持つて来い鎖!あとハシゴ!」

「ギャーーーーッ!!!!」

スタジオ内は騒然としてパニック状態が続いた。

番組はあわててCMを流し、事態を收拾しようという事となった。しばらくしてスタジオ内に居た観客やスタッフ、稲川さん達出演者もだいぶ落ち着いてきて怪現象も収まったのだが、もはや番組としては成り立たなかった・・・。

放送を終えた稲川さんは前野さんに声をかけた。ちよつと寄り道して行こうと思つたのだ。

当初の予定では稲川さんと前野さんの2人は、先ほどのお昼の番組の放送を終えた後、大阪にいる稲川さんと親しい友人の3人でお酒でも飲んで、その夜はホテルにでも泊まつて翌朝東京に戻り、稲川さんは夕方からの番組に出演するという事となつていた。

しかし昼間の番組での怪異があまりにも状況がひどかつたので、稲川さんも落ち込んでいた。早く大阪から離れたいと感じていた。

そういつた事情を説明して大阪の友人と会う約束を丁重に断り、稲川さんは前野さんを西伊豆の戸田という場所にあるホテルに寄つて行こうと誘つたのだ。

というのも、このホテルは稲川さんの所属する事務所の女性の父親がこの場所で経営しており、この日は稲川さんの家族やマネージャーの家族、その他友達や事務所の人間、タレントではロス・インデイオスのリーダーといった稲川さんと親しい人達が事務所の女性に誘われて泊まりに行つていたので。

重苦しい気分を払いのけたかつた稲川さんは、こういった人達と楽しく遊んで行こう、と考えたのである。

「それでいいかな?前野さん」

「うん、いいよ」

こうして2人は人形を持ってT V局を出て、新幹線「こだま」に乗って西伊豆の三島駅に向かった。しかしここで、今だに稲川さんが理解に苦しむ不可解な現象が起きた。

大阪で生放送が行なわれたお昼の番組は、先ほども述べたように午後二時から1時間放送される。三時に終了するのだ。

それから新幹線に乗るために駅に向かったとしてもせいぜい30分かかるかどうか？といったところである。

大阪から伊豆の辺りまでは、新幹線で正味4時間ほど。午後八時前後には到着するはずだ。だが実際に2人が伊豆の三島に到着してみると時間はすでに真夜中の零時近くになっており、稲川さん達が乗った新幹線がこの日の最終だったのだという。

その三島駅から戸田のホテルまでは、一度バスに乗って小さな港まで行き、そこから船で行く事になっていたのだが、バスも船もすでに運行を終了している。

仕方なくタクシーで行こうとしても、タクシーの運転手達はどの人も

「あそこはもう今の時間だと、陸の孤島となっちゃうから遠くて行けない」

という事で乗せてくれないのだ。仕方が無いので稲川さんはホテルの管理人、つまり事務所の女性の父親に連絡をとり、迎えに来てもらう事にした。

そして車に乗りこみホテルまで向かったのだが、行きの道中に前野さんが稲川さんに心配そうに話しかけてきた。

「稲川ちゃん、大丈夫かな？」

「・・・なにが？」

聞いてみると、少女人形は紙に包んで袋に入れて、車のトランクに入れていたのだが夜道で、しかも舗装も荒れた道路のために車はガタガタ揺れている。そのため人形が壊れないか心配だと言うのだ。

「稲川ちゃん、大丈夫かな？」

「ちょ、ちよつと前野さん、やめなさいよ・・・」

稲川さんは小さな声で前野さんに注意した。せつかく乗せてくれている管理人のお父さんに失礼だと思ったのである。

そうこうしている内に、今度はフロントガラスの向こうからこちらに向かつて白い光が幾つも飛んで来るのが見える。

まるでムササビのようなその光は、止むどころか段々と増えてきた。しかし不思議な事に車を運転している管理人さんにはまったく気づいていない。稲川さんと前野さんの2人はその様子を息を呑みながら見つめていた。

「あ……、ああ……」

光が飛んでいくたびに前野さんは声を出す。

「……やめなさいよ。あれはムササビなんだから……」

前野さんだけでなく自分にも言い聞かせるように、稲川さんはそう言った。

やがて車はホテルに到着した。中には親しい友人達が待っている。稲川さんもみんなに早く会いたかったし、大勢で盛り上がろうと思っていたために大きな声で挨拶をしながら大広間の扉を開けた。

「おい、みんな元気かー!？」

「……」

シーン……として声は無い。その場に居る誰もが表情をこわばらせ、無言で座っていた。

頭を抱える者。小刻みに震えている者……。

その様子を見た稲川さんは驚いて事情を聞いてみた。

「ど、どうしたの?……みんな?……何があつたの!？」

しかし、特に理由は何も無いのだという。理由も無いのに、みんなが申し合わせたかのように口をつぐみ、落ち込んでしまっていたのだ。予想外の状況に戸惑った稲川さんだったが、そのあとから前野さんが静かに部屋に入ってきた。

挨拶もせず黙って入ってきた前野さんは稲川さんやその他の人達の顔を素通りし、部屋の一歩奥まで人形を抱きかかえて持つて行き、人形を置いて包みから出そうとする。

稲川さんをはじめその場の人達は何気なくその様子を見ていたのだが、袋から出てきた少女人形の姿を見て、アッ！と息を呑んで驚いた。

それは人間の顔ではなかった。

切れ長だった美しい眼は顔の半分以上はあろうかという位に醜く腫れ上がり、静かな微笑を携えていた口はだらしなく開いて、横に大きく裂けている。髪はボサボサに伸び、乱れている。

それはまさに「化け物」といった方がいいような、そんな代物であった。

その場に居た全員が、稲川さんと前野さんが出演した舞台を観たり、あるいは楽屋で見かけたりして、以前その人形がどういう姿形であったか？という事を知っているために、あまりにも恐ろしいのだ。とうとうみんなは怖くてその夜は眠れず、翌朝早々に引き上げたそう。

後日。

その話を聞いたそのホテルの管理人の奥さん、つまり事務所の女性の母親が、その人形を供養するという意味で自分が人形の着物を作つてあげましょう、という事を稲川さんに伝えて欲しいと言つて来た。

この事務所の女性の実家というのは、代々着物を作り家紋を染め上げるような仕事を生業として来た由緒ある家柄であった。

そして稲川さんは前野さんに頼み、人形をそのホテルにもう一度持つて行つてもらい奥さんに渡して、人形の着物を作つてもらう事にした。

この日の夕方。

TV局に仕事に向かう準備をしていた稲川さんの元に前野さんがやつて来た。

「やあ、前野さん。どうしたの？」

「うん、稲川ちゃん。今人形を置いて来たんだけど、茶巾寿司とお茶を置いてきたし、お腹も空かないしのども乾かないよね？」

という事を言つて来たのだ。

（ああ・・・前野さんもきつと怖かったんだな・・・。）

稲川さんはふとそう思ったという。

そしてこの年の秋。稲川さんと前野さんはこの人形を使って最後の舞台を公演する予定だったのだが怖いので使わず、別の人形を使って公演を行なった。

やがて舞台は順調に進み、千秋楽を迎えた。

その後事務所にはスタッフや出演者、その他関係者達が集まり打ち上げパーティーが盛大に執り行われた。しかし稲川さんはこのパーティーには参加できなかった。

その翌日の事である。

稲川さんはパーティーに出ていたスタッフの1人から奇妙な話を聞かされた。パーティーの途中から、前野さんの姿が見えなくなり、いくら探しても見つからなかったというのだ。誰に聞いてもその行方は分からない。

前野さんといえば、稲川さんと並んで実際に人形を扱う影の主役のような大切な人物であるから、八方に手を尽くして探してみたがどうしても見つからず、忽然とその姿はどこかに消えた。

行方不明となつてしまったのだ。

その後も稲川さんやスタッフたちは前野さんの行方を探したがまったくつかめず、月日だけが過ぎて行つた。

1ヶ月・・・2ヶ月・・・そろそろ3ヶ月が過ぎようか？という頃。

その日の仕事を終えた稲川さんが自宅に帰ると、玄関の扉に大きな目玉のポスターが貼つてある。

「うわ・・・何だよこれ・・・」

その気味が悪いポスターが気になりながらも、稲川さんは扉を開けて玄関に入った。

「ただいま。気持ち悪いポスターだね、誰が貼ったの？」

すると家の奥から声が聞こえてきた。

「稲川ちゃん・・・」

変わり果てた姿となった前野さんであった。

前野さんは体格も良く、髪も長く伸ばしているおしゃれな紳士だったのだが、服装は浮浪者さながらであり、髪は真っ白に色が落ち、頬はこけてやせ細っていた。

驚いた稲川さんは前野さんに色々な事を質問して行く。

「ど、どうしたの前野さん！？どこ行ってたの！！！」

「稲川ちゃん大丈夫だよ・・・」

今日家を出て来る時に三角の白い紙を置いて来たからね・・・。あれが四角になれば全てが丸く収まるよね、稲川ちゃん・・・」

しかしこの様な訳のわからない事を言っただけで、何も答えようとしな。いや、答える事が出来ない。

2ヶ月半の記憶が失われていたのだ。

だから自分がどこに行っていたのか、どうやってそこに行っただか？まったく分からない。

さらに何も身分を証明する物を持っていなかったためにどこの誰からも連絡が無かったのだ。

その様子を見て只事ではない状況を察した稲川さんによつて急いで病院に担ぎ込まれた前野さんは、周囲の人達の看護の甲斐もあつて徐々に回復し、意識も正常な状態に戻って行った。

「ああ、良かった。前野さんが元に戻って・・・」

「心配かけてご免ね、稲川ちゃん」

「でも、ほんとにどこに行ってたの？」

「うーん、それが全然思い出せないんだよね」

前野さんの回復を喜んだ稲川さんは毎日のようにお見舞いに行き、前野さんを励ました。

それからしばらくしたある日の事である。

今ではすっかり回復した前野さんの元に、東欧の方の芸術団体から誘いがあつた。

もともとこの前野さんという人物は、日本でも屈指の日本人形使いであり、その舞台の高い芸術性は海外でも広く紹介されるほどの才能を持った人であつた。

その前野さんにヨーロッパで公演を行なつて欲しいという誘いがあつたのだ。

これはもう大変な名誉である。この事を聞いた稲川さんも大喜びで祝福した。

「良かったね、前野さん」

「ああ、ありがとう稲川ちゃん。ついでにアメリカの方も寄つて行きたいね」

毎日こんな事を話しながら前野さんの出発は近づいて行つた。

そんなある晩の事である。

自宅でくつろいでいた稲川さんの元に1本の電話があつた。

前野さんからであつた。

「はい、もしもし？」

「やあ、稲川ちゃん」

「ああ、前野さん。どうしたの？」

「いよいよ明日出発なんだよ」

「そうか、頑張つておいでよ」

「うん、楽しみだしね」

「それでさ・・・」

稲川さんは前野さんを激励し、その後2人はとりとめも無い会話を少し交わした。

そして、稲川さんは何気なく人形の事を思い出して前野さんに聞いてみた。

「あ、そういえば前野さん。人形はどうした？」

「ああ、人形は作ってくれた人の所に今日持つて行って、預かってもらう事にしたよ」

「そうなんだ。それなら安心だね」

人形を作ってくれた人というのは、今は京都で仏像を彫っていると
いう例の人物である。

そんな話を話しながらも、稲川さんは時間も遅いので電話を切る事
にした。

「じゃあねー、おやすみー」

ガチャン。

翌日。

仕事を終えて帰ってきた稲川さんに、稲川さんの奥さんが青ざめた
表情で言った。

「あなた・・・大変よ・・・」

「なにが？」

「前野さん死んだみたい・・・」

「なんだそれ！？死んだみたい、って、どういう事なんだよ！」

あまりに突然の話に動揺しながらも、稲川さんは奥さんに事の真相
を聞いてみた。

「焼け死んだんだって・・・」

「いつ！？」

「夕べ・・・」

「？？？死んだみたいってのはどういう事なんだよ！？」

というのも、この火災は新聞やニュースでも取り上げられたのだが、
遺体の身元がどうにもハッキリしないらしいのだ。

この時点、当然警察による検死は行なわれていたのだが未だ不明な
のだという。

深夜に前野さんの家から出火したのだから、出てきた焼死体は当然

前野さんである可能性が高いにもかかわらず、である。

「そんな訳ないよ！だって俺、夕べ前野さんと電話で話してたんだもん！」

・・・しかし残念ながらその遺体は前野さん本人であつた。

しかし稲川さんはどうにも釈然としなかったという。

稲川さんはこの前野さんとは長い付き合いであつたから前野さんの人柄というものを熟知している。

それによれば前野さんという人物は大変几帳面であり、寝タバコはしない、お酒だつていい加減な飲み方はしないのだった。

ましてや翌日には海外への出発を控えた大事な夜に、酒を飲んだくれて酔い潰れてしまうような事など、考えられない事だというのだ。それに、前野さんはそもそも酒には相当強いというのもある。

結局、前野さんが泥酔して火事を出したという事でこの件は落ち着いたのだが、ある日稲川さんは奇妙な事に気が付いた。警察が割り出した前野さんの死亡時刻の事である。

よくよく思い出してみれば、稲川さんが前野さんと電話で話していたのは火事の真つ最中なのである。

もし仮に稲川さんと電話で話した後に前野さんがお酒を飲み、酔つてしまつて火事になつている事にも気が付かないほどに意識を失うまでには相当の時間がかかるはずだ。

しかし前野さんは稲川さんに電話をかけてきた・・・。

稲川さんはこう言う。

「・・・という事は、俺と話しているときには前野さんの周りはずでに炎に包まれていたか、もしくは・・・すでに前野さんは死んだ後だつたという事になるんですね・・・」

稲川さんは前野さんという親しい友人の死ををきっかけに、この事件にはほとほと嫌気が差し、完全に忘れようと心に誓つた。

その後も何回かこの話をTVの怪奇特集で取り上げたいという話を持ちかけられたのだが、もはや稲川さんはまったく聞く耳を持たな

かった。

一刻も早く忘れたかったのだ。

それにこの話をする事によって周囲の人間に不幸が訪れるのもイヤだった。

そして、十数年の年月が流れた。

もはや人形やそれにまつわる色々な事件の事も人々の心から忘れ去られようとしていた。

稲川さんの元に一本の電話があった。

電話の主は、西伊豆のホテルを経営する父を持つ女性からであった。今は結婚して会社を退職している。

関西のTV放送の後、この女性の父親の経営するホテルがある西伊豆まで稲川さんと前野さんの2人が向かった、という事があったのはご存知の通りだ。

「やあ、久しぶりだね」

懐かしさに色々な昔話を楽しく交わしていた稲川さんと女性であったが、ふと女性が稲川さんに相談事を持ちかけてきた。

「稲川さん、ちよつと相談があるんですが・・・」

それまでの明るい話し声とはうってかわった深刻な口調に、稲川さんも真剣に耳を傾けた。

それによると、この女性には結婚して可愛い女の子の子供が出来たという。

今ではもう4歳くらいになり、言葉もちゃんとしゃべれるようになったのだが、この子の様子が最近おかしいのだという。

夜の夜中にこの子が、

「・・・へー、そうなんだ。ふうん面白いねー。アハハ！そっか・・・」

このような寝言を言うようになったのだという。

しかし正確にはこれは寝言ではなかった。

（随分ハッキリした寝言を言うんだな・・・）

と思い、思わず目を覚ました女性だったが、子供の様子を見て背中に冷たいものが走ったという。

真夜中の12..00を回った、深夜である。

にもかかわらず4歳の子供が布団の上にキッチンと正座をして、誰も居ない場所、空間に向かって楽しそうに話をしているのだ。

しかもそれはこの晩だけではなくしょっちゅう、今も続いているのだという。

しかし、

「寝言を言っている子供には話しかけてはいけない」

という事をどこかで耳にしていた女性はつとめて冷静に、子供には話しかけなかったのだという。

だがさすがに気味が悪くなった女性は、ある日怒鳴り声のような大声でその子に話しかけたという。

「誰と話してるの！！！？？？」

するとその子は平然と答えたという。

「うん、お姉ちゃんとお話ししてるの」

「お姉ちゃんって・・・どこに居るの！！！？？？」

「お姉ちゃんここに居るもん」

とその子が指を指した方向を恐る恐る見てみても、誰も居なかったという。

恐ろしくなった女性は子供を無理矢理寝かしつけ、自分も眠ってしまった。

その翌朝、女性は子供に質問してみた。

「・・・お姉ちゃんってどんな子だった？」

「お姉ちゃんねえ、すぐくちっちゃいの。おかっぱ頭でね、お着物を着てるの」

「でも稲川さん・・・あたしそんな知り合い居ないです・・・」
女性は恐ろしさに声を震わせながら電話口で話している。

そこで稲川さんは女性にアドバイスをした。

「じゃあね、その子に今度お姉ちゃんが来たらそのお姉ちゃんはどうなご用事があつて来ているのか聞いてもらいなさい」
「はい・・・」

それからしばらくして稲川さんの元に再びその女性から電話があつた。

相変わらず子供は

「ふーん、そう。そうなんだ。面白いね。アハハ！」

といった具合に、様子は変わらない。

しかしその女性はもはや眠るどころの話では無い。

恐怖のあまり布団をかぶって、中でガタガタ震えていたのだという。

そして翌日。

「お姉ちゃんはどうなご用事があつたの？」

「うん。お姉ちゃんねえ、お姉ちゃんのお母さんを探してるんだつて」

「？お姉ちゃんのお母さんって・・・誰なの？」

「お姉ちゃんのお母さんっていうのはねえ、お姉ちゃんのお着物を作ってくれた人なんだつて」

この時の様子を克明に電話口で話しながら女性が口を開いた。

「そういえば稲川さん・・・あたしの母が「例の人形」の着物を作りましたよね・・・」

女性はこの話を自分の母親にも話したという事だったが、それを聞いた女性の母親が、あの人形のことが気になるから一度見てみたいと言っているらしいのだ。

稲川さんは了解し、現在人形を預けているお寺の人と連絡を取る事を約束した。

人形は最後に前野さんが預けたお寺に、今も安置されている。

電話でお寺の方に確認してみたところ、毎日お供え物をあげて、着物や体もたまに掃除して大事に奉つてあるのだという。

稲川さんは事情を話し、一度人形に会いに行ってもかまわないかという事を聞くと、お寺の人は快く承諾してくれた。

安心した稲川さんは女性にこの事を伝えようと思ったのだが、たまたま仕事の仲間から電話が入り、話し込んでしまった。

電話が終わった後に稲川さんは女性に電話する事を思い出し、受話器に手を伸ばした。

すると、まさにその瞬間である。

電話が鳴った。

「ハイ、稲川ですが」

「ああ、こんにちは、先程はどうも・・・」

電話をかけてきたのは、ついさつき稲川さんが電話で話した、人形を預かってもらっているお寺の人であった。

「ああ、こちらこそ。先程はどうも。今週中にでも私とその女性、それと母親でそちらに伺おうかと思ってるんですよ」

「実は・・・その事なんですが・・・」

「？どうかしましたか？」

「・・・居ないんですよ・・・」

聞いてみると、稲川さんとの電話の後、そのお寺の人は人形の様子を見てみようと思い、奉つてある場所に行ってみたのだという。

すると信じられない事に人形の姿が無かったという事であった。そばに置いてあった人形用の着物も一緒になくなっていたのだとい

う。

結局人形に会いに行く事は出来なくなってしまった。

それからしばらくして、再び女性から電話があった。

「稲川さん……。最近娘が以前とは違う事を言ってるんです」

「……。どんな事？」

「お母さうん。お姉ちゃんはねえ、あっちの方でバラバラになってるよ？」

それ聞いたとき、稲川さんの頭にはなぜか「四国」が思い浮かんだという。

なぜなのかは稲川さん自身理解できなかったという。

しかしよく考えてみると、四国というのはあの前野さんの菩提寺がある土地なのだ。

つまり前野さんの実家が、四国にはあるのである。

だがこの話を聞いても特に稲川さんは驚かなかった。

むしろ納得したようにこの話を聞いていた。

というのも、この電話を女性からもらう直前に稲川さんの身に不思議な事が起こっていたのだ。

稲川さんの部屋はマンションの最上階にある。

稲川さんはクーラーが苦手なため、夏の暑い日は窓を開けて寝てしまふのだという。

最上階なので風通しが良く、心地よく寝られるのだ。

枕元の窓にはスダレがしてあるのだが、たまにマネージャーが入ってくるとそのスダレがこされるような音がするので、すぐに目が覚めるという。

この日も稲川さんは寝ていたのだが、

「パタパタパタ……」

という聞き慣れた音で目が覚めた。

「……。ウーン。ガンちゃんかい？どうしたの？」

ガンちゃんという愛称のマネージャーなのだが、この日は半分寝た状態の稲川さんが声をかけても返事をしないで部屋の中を歩き回っている。

不審に思った稲川さんだったが、眠たかったので特に気には留めず、再び眠ってしまった。

後日稲川さんはガンちゃんに聞いてみたのだが、稲川さんの部屋には行っていないと言う。

しかしそれからずっと、である。

その不審な物音は一向にやむ気配が無い。

稲川さんが眠っている最中だけではなく、起きているときにもハッキリとその音は確認できるほど鮮明なのだ。

稲川さんはそのうち、

「・・・来る・・・」

と、感じ取れるまでになっちゃったという。

稲川さんにはその足音の主が誰なのかはほぼ見当がついていた。

「・・・恐らくあの人形は生きていて、今も自分に関わった人間を求めてさまい歩いているんだ・・・。という事は・・・」

その時である。

稲川さんが「という事は・・・。」と考えた瞬間に稲川さんは自分に向けられている不気味な視線に気が付いた。

ビクリして辺りを見渡してみる。するとフスマの隙間が開いていた。

そこには・・・。

おかっぱ頭で真っ白い肌をした女の子が顔を半分隙間から覗かせて、稲川さんの方を「ジューッ」と見つめているのだ。

来ているのです・・・。

稲川さんの方を見ているのです。

それは今も続いているのです。

「・・・進行中なんですよ、この話・・・。」

このお話を録音したテープが、十年くらい前に発売されたそうですが、テープを購入した人たちから、クレームが殺到したんだそうです。

なんでも、再生中に、考えられないような現象が相次いだらしいです。

1週間も経たないうちに、このテープは発売中止になったという・・・。

で・・・

このお話は、まだ終わっていないんですよ・・・

あるラジオ番組で、こんな話を聞いたんです・・・

最近・・・

稲川さんが、チャップリンの格好をして写真をとったら・・・亡くなった人形師の方と、例の人形が・・・稲川さんの両端に写っていたらしいんですよ・・・。